

奥野信太郎旧蔵の戯単について

波多野, 真矢
庆应义塾大学 : 非常勤講師

<https://hdl.handle.net/2324/2344828>

出版情報 : “戯単、劇場與二十世紀上半葉的東亞演劇” 學術研討會論文集, pp. 258-260, 2019-08-27.
Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



奥野信太郎所蔵戲單について

慶應義塾大学（非） 波多野 眞矢

中国文学者で随筆家、テレビ・ラジオにも登場し、多くの著書を遺した奥野信太郎は、慶應義塾大学文学部中国文学科の教授であった。1968年に逝去し、遺品のうち書籍は慶應大学図書館に奥野文庫として収められており、それ以外の雑多な資料は中文研究室に非公開で所蔵されている。その中に、奥野が中国から持ち帰った戲單がある。

奥野は1899年、橋本左内の実弟を母方の祖父に持ち、陸軍大尉奥野幸吉の長男として東京に生まれた。幼少時から漢学者・竹添井々に漢籍の素読を教授され、中国古典に通暁していた。一方、開成中学入学後には開成座、浅草オペラなど劇場通いを始める。永井荷風に傾倒し、慶大文学部に進むと、久保田万太郎や折口信夫からその才能を高く評価され、卒業後は文化学院、慶應大学で教鞭を取るようになる。1936～1938年には外務省在華特別研究員として北京に留学をする。その後も1940年、1942年、1944～1946年（北京輔仁大学客員教授）、1954年に調査や教学で中国を訪れている。その間に趙蔭棠、周作人、錢稻孫、孫楷第など多くの知識人とも交流し、旺盛な好奇心を持って、あるがままの中国の姿を隈なく見て回った。学術論文を書くのを好まず、大上段に構えた文章を嫌った。学識をひけらかすのではなく、粹でさりとした文の端々に鋭さが垣間見えるような、味わい深い随筆を多く書いた。

奥野は京劇を好んだ。中学時代からの演劇好きや漢籍の学識という下地があったことも、京劇への橋渡しとなったであろうが、奥野は嗅覚鋭く中国人の食と芝居に対する特別さを感じ取っていた。最初の留学からの帰国後、「わたくしはいつも思うことであるが人間である以上、金銭もほしかろうし名誉も望ましいには違いないが、北京の人間を見ていると、それと同等位に美食と観劇とを常に欲しているのではあるまいか。そして時としてはその名利すらも美食と観劇とを遂行するためにだけ追求するとさえ思えることがしばしばある。彼等の演劇への陶醉は、現代における一つの謎といえるであろう。」¹と書き記している。北京で暮らし、日本人とは異なる北京の人間たちの生き方を目の当たりにし、深い驚きと興味を覚え、常に冷静な観察や思考をしながらも劇場に入り込み、そこに繰り広げられる世界を堪能するのを心から楽しんだのであろう。

奥野の収集した戲單には二種類ある。現在図書館に収蔵されている「光緒初年老戲單」、あとは中文研究室にある「民国初期以降のバラの戲單」である。前者は黄色の横長の紙片に十数個のタイトルのみが木版印刷されており、「左傳事緯前書目録」と書かれた線装小冊子の13頁分に各頁3枚ずつ、合計39枚貼られている。日付と劇場が毛筆で書き込まれたものもある

¹ 『支那劇の話』「話」話社 1939年7月（『寝そべりの記』論創社1984年6月所収）

が、何年のものかは不明である。古書店で購入したか、知人から譲り受けたものと推測される。これは日本で存在が確認されている戯単のうち最古のもので、中国でも公開されているのはほんの数枚しかない。巻末には自筆による簡単な解説が付されており、その資料的価値を十分理解して入手したと思われる。

中文研究室蔵のバラの戯単は合計 65 枚あり²、自ら観劇したものと、やはり購入したか譲り受けたものがある。以下、年代と枚数を列挙する。

1914 年・3 枚／1916 年・1 枚／1918 年・3 枚／1919 年・5 枚／1920 年・1 枚／1921 年・1 枚／1922 年・1 枚／1937 年・11 枚／1938 年・28 枚／1952 年・1 枚／1954 年・3 枚／年代不明・6 枚／その他・3 枚（映画・児童劇・戯劇報広告） 合計 67 枚

このように年代から見ると、留学以前のもものが 15 枚あり、それ以外は概ね奥野自身が観劇したものであると思われる。やはり北京留学をしていた 1937～38 年の戯単が多い。北京輔仁大学客員教授時代の戯単が見られないのは、終戦後の混乱により持ち帰れなかったものと思われる。

続いて、劇場、役者など別の要素から考えてみる。まず、劇場については以下のようなになる。

新新大戲院・19 枚／吉祥茶園（吉祥戲院、吉祥大戲院、吉祥劇院を含む）・10 枚／第一舞台・6 枚／中和戲院（中和大戲院・中和茶園を含む）・4 枚／長安戲院・長安大戲院・3 枚／華樂戲院・2 枚／慶樂戲院・2 枚／大衆劇場・2 枚／文明茶園・丹桂園・江西會館・三慶園・新明大戲院・光陸電影院・廣和樓・奉天大舞台・國泰劇院・大觀樓影院・西関樂善戲園・真光電影劇場・三慶戲院・各一枚

幅広く、多くの劇場に行っているが、特に新新大戲院は 1937～38 年に 19 枚で最も多い。奥野は留学中に故宮の東側、孟公府にあった中国実業公司公館に寓居しており、新新大戲院は西長安街にあって、通うのに便利であったことも関係していると思われる。

次に、観劇対象である役者（または団体）のうち、枚数の多いものについて見てみる。

小翠花・8 枚／馬連良・梅蘭芳・6 枚／楊小樓・程硯秋・金少山・陸素娟・4 枚／尚小雲・荀慧生・3 枚（以下省略）／団体では富連成・6 枚

奥野が最も愛した役者は小翠花であった。「京劇の発展と梅蘭芳」という文章では、以下のように自述する。「現代中国において梅蘭芳、程硯秋、荀慧生、尚小雲、小翠花をあわせて五大名旦と称し、女方俳優の最大なるものとしているが、その一人一人いずれもすぐれた俳優で

² 同行者と共に観劇したと思われる同一戯単の重複が 6 例あるが、12 枚ではなく 6 枚としてカウントした。枚数で言えば 71 枚ある。

ありながら、さてもっとも円満に完全なものといえはこの梅蘭芳を措いて他には求め難い。たとえばわたくし個人の好みからいえば小翠花のごときはもっとも妖艶妍媚の芸風をもっていて、心をうたれることすこぶる多いのであるが、残念なるかな悪声でその唱は聞くにたえない。こういう点になると梅蘭芳は、唱、白、科すべてにおいて間然するところのない完全さをもっている俳優といわなければならない。」³これは1956年の梅蘭芳三度目の来日公演に際して寄稿した文章であるのに、自分の好みは小翠花であることを明言している。また、確かに「五大名旦」の五人目に小翠花が並べられることもあるが、徐碧雲やその他の役者が入ることもあり、すでに梅蘭芳、程硯秋、荀慧生、尚小雲の四人の女形で四大名旦と称するのが一般的であるので、ここにも小翠花最眞の様子が見てとれる。楊小楼は早期の戲単に名前が出ているのみであり、奥野自身が観劇したのではない。実際に観劇している役者で言えば、四大名旦や馬連良、金少山ら人気の高い名優の観劇回数が多いのは当然としても、まだ若く名声の定まっていない女優・陸素娟の観劇回数が多い点も、やはり奥野の戲単の特性と言えるであろう。知人が陸の住居の大家であった関係から、知人と共に自宅に招かれ、演じてほしい演目を伝えたところ後日変わらず上演したという、その誠意と人柄が心に沁みたとある⁴。そのほか、富連成科班の学生たちの舞台も大変好んだ⁵。それらに対する思いは、奥野の著作のあちこちに散りばめられている。

こうして奥野は観劇に付随する多くの感情や思考とともに、戲単やチケットを日本に持ち帰った。保存については特に頓着することなく、ほとんどに折り目が入り、シワ、虫食いや破れのある状態であるし、デザインや記載内容など戲単そのものについて言及された文章も見られない。そうした点も、青木文庫や濱文庫の戲単の収集状態とは異なり、それぞれの個性が出て興味深い。

³ 「京劇の発展と梅蘭芳」『世界』1956年8月（『中庭の食事』論創社1982年6月所収）

⁴ 「陸素娟のこと」（『隨筆北京』第一書房、1940年）、「その後のこと」（『北京襟記』二見書房、1944年）、「二妙堂珈琲館」（『日時計のある風景』文藝春秋新社、1947年）。

⁵ 「演劇の二道場」（『隨筆北京』第一書房、1940年）、「富連成を惜しむ」（『日時計のある風景』1947年、文藝春秋新社）。